



物草志郎八

~13
4269
8



八三
4269
8

物草太郎卷之八



英雄闘剣 敬馬佳人
亞相鳴絃 誠狂士



思誠感神と人若も誠ありまゝに争でる神冥佛の
感得ありんや席女を亮賊のよに臨りて十分た
るをくらに希財天女代替得し物草太郎が極ひと
得く帝の御まぬがとる衣をのりて衣を脱ぎ
男子の身をばねし路にたどるも定しゆくありつぬ
姿の御まがう面羞りく傍に居る衆に揺とらうけて

本誌英天氏
寄贈

91-2153



名湯とらるる
月出乃
光小两个
言々
太郎
物草

浅井
七



草

雲時息とぞ休歎する物草を即ち麻女が歩み
何れも先景みたるこまり我知あり容と了に彼
目ども其の弱を建うしむ術ふさいほうせんを負
てまろく染るるれども我負ふと堅要る符咒を負めれ
はでさう魚子一里へ出ふ轆子までも傷まらるる
忍耐く歩ゆる人ともよ麻女々物草を即ち朴實み
して忠たふ言と離く會致して息人の忠たる言
聞くと其情も凄くわづらゆるあどころりゆふに而
より六尺ぢり糸の太の海子暗黒みくさうふ具く
程ども山塞の担筆あまきし物草を即ち麻女

本後みまのどせ泣きくし様子見せし其方も
の山賊ごんまして衣代掠り力の鞘と湿し等と左
たり物草を即ち大呼して日休蟲る賊衣も服も徳ん
して太歳頭上に土灰動もわと刀を輪して破るる
まやける夏もい六刀代併く切結ぶに両下撃剣の
殿景代分た一個猛席の風よ吹く勢ひとが頂門と
ひらき撃つとどば一個惡統の雲代起してあどころ
么肝と目ぢけく刺んも。伏修羅大釋の文戦も
るしとがさうりや麻女々山塞の担免うとを
まじし隙とく又眼あり刀争は交戦と身と魂身

谷川次行衣代徹とく一さにせざる鏡とちうりたる鳴なりも
市音いちおんお宵暗黒律せうあんくわくりつ四更しごうの空そらおろした車くるまのころり行ゆ
月雲つきぐも阿鼻界あびがいて臨前りんぜんたる本阿ほんあらう洩ひらく来る月光げっこうお
のの見みてははるあはれあはれ兄あに浅井あさい氏うぢちうりたる水みづ
藤ふじ女めち首くび之の代しろ劫りやくお兄あにあやまらしたまふ家いえ思おも人ひとをさ
叫よぶ喚こゑり化けち肉にく身みの姉あね子の聲こゑ身み半はん氏うぢ貫つらぬたる所ところ
徹とくやうが代しろ姉あね子の個こゝろの山中やまなかお存ぞんじられたる代しろ忍しのびた歌うたお
計けい較けうせり破やぶ後ごとありせり執とく勢せうとせりも料りょうざうり
おとも撥はく圖ずとありせり代しろ物もの草くさを即すなは聲こゑり代しろ揚あき士し西せい雲うん時じ
交かう戦せんと止とどまり流なが流りゅう代しろ國くに代しろ今いま作つく代しろ害がいやうり力ちからと身み然しか

と地ちに投な舍するふ化けも刀や代しろ鞘さや内うちにおろせり藤ふじ女め之の色いろ
か身み辺へに接せつ迎むかへ悲かな喜しみ交かう集じふるさなるもの涙なみだあ
藤ふじ女め々々淚なみだ眼まなことわ拭ぬぐひお日ひ井い生せい洲しゅうの疾はや才さい女めの神かみ
紀きへ拈ねん香かうや一ひと紙し中ちゆうにく亮りやう賊ぞく及および劫りやくして山さん塞さい又また捉とりし
あうり代しろ物もの草くさを即すなはち極ごくのとりて難なん代しろ免めんがとらるるこ
詳細しんじゆにのりてふ屯とん一ひと五ご十じふ代しろ團だん々々倉くら惶おそき火ひ災さい下した
て目めとおおしりし紙し息いき人ひとをさ代しろ石いし茶ちやの罪つみ海うみをらに言い
か一ひと饒にぎめたまりしと殷いん勤きんよびるるに物もの草くさを即すなはち見み
妹いもうとの人ひとともあうりて危あや殆うくよまう傷害けがれふさこそ侍さむらい候こうられ
と晴はら思おもは屯とんが劍けん法ほう尋じん弟ていをさうり代しろ威い代しろ也やも物もの草くさ

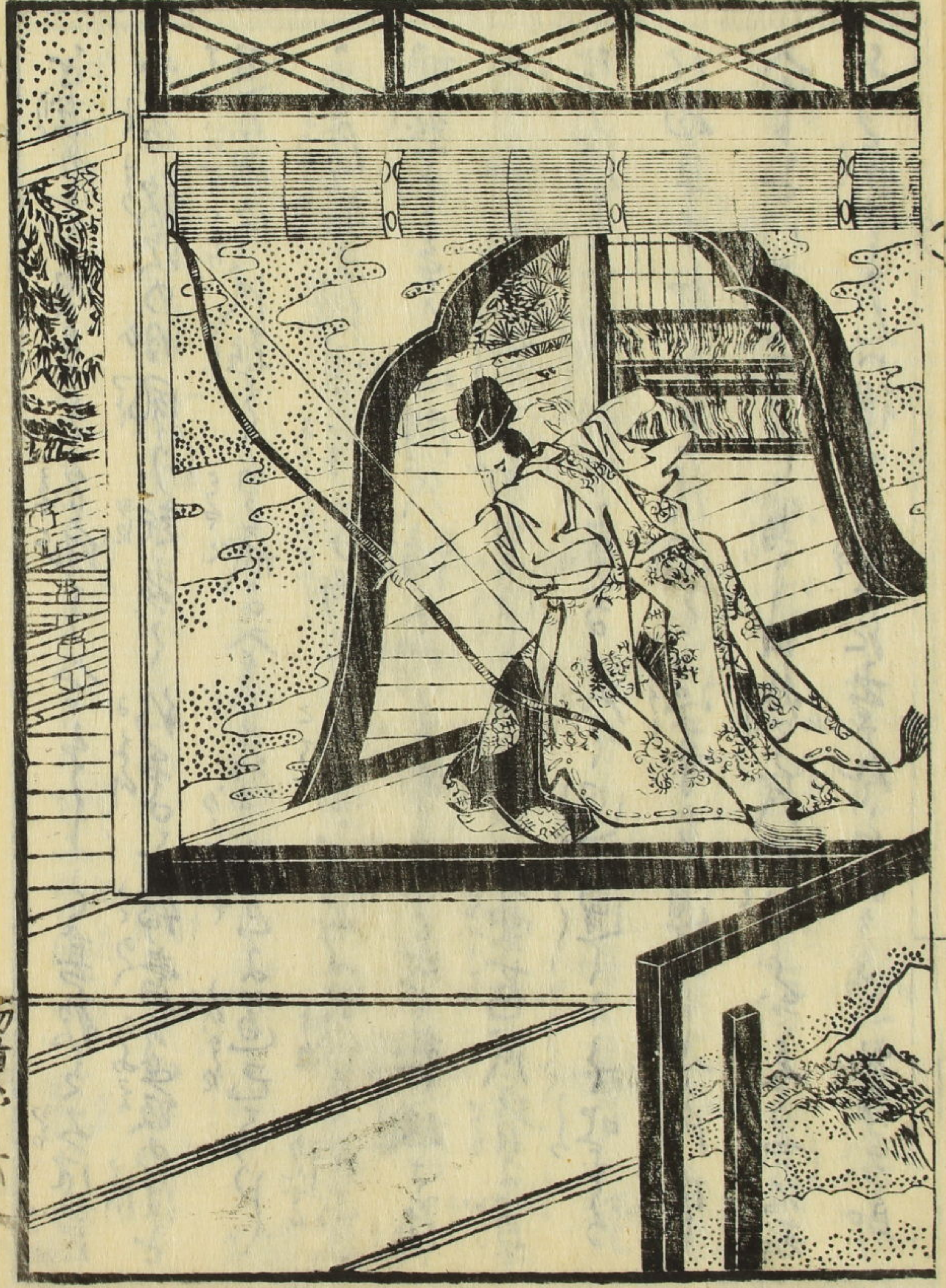
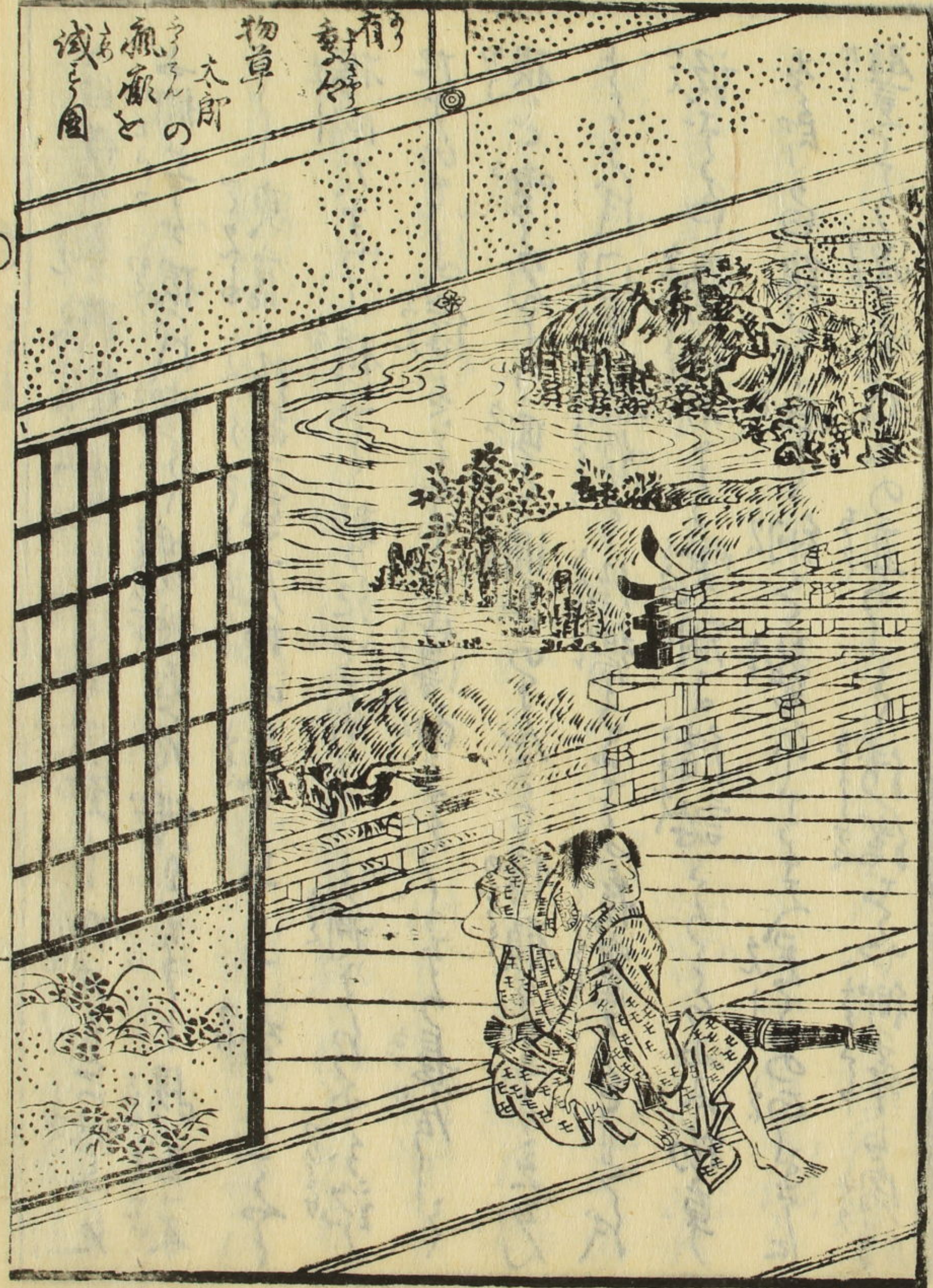
神出鬼没のふ族あるに致した我武技試比のふ徳園を
 仍ももても事々個々劍法のふみもせだいなる人少水の産
 なる内圓のふと物事す即よ向ひ貴客と竹亭の人ふは
 中なる願ふ芳名氏同んと流う物事す即よ自氏と即ち
 信州は其ノ郡ありしにの御抄書を所委籌とて流うた
 甚盛すも其内衆の中より選すれ京都より上り
 家の中より諸紳を勤仕はせりてそのくはふのゆらふ
 ころして流う伏う疾速のく頭と秋のふは乃我
 しとく面々垢う堅う衣彼の穿ありてそぞろ視
 の人々身もましく劍法急と事々たるに瞳子の衆ありた

とんねびのくはいなる人の世代志のびにあやみ袖を
 あしとて照り同も後ろ元々曉くは紙のひ
 よしある長治院に時と絶は令妹と御よ遊あり
 めもも早巳我中と重擔ありしとて地しとる孫あり
 ば重都とくくくくく名濁を命しと行くとるふ
 我も其國へ志し来め是と姓よとと重都へおつて後
 こも素懐代送とて向ドを都へ赴ん願ふ侍ひ
 仍ん独往の路をうとてたうふ事らうらんふとふ
 物草太郎頭と掙と雪我令妹ととづらの逢と侍ひ
 とりのふふ事とて事々の侍と耐煩とて叙雜社膝白事

まごの侍ら請先あふとむむくはまき飾うた舞
屯もうちらしよびさるる前へ進み後より追はるる
てこそ會まらぬと相楯して別るる物草太郎と屯
と別れ流方江の踏代程なく近江路は着く琵琶
色瀬の風景代着るる滄波漫々とて水は天と舟よ
曳り湖中ぬ住来ふ舟の遠くいと方たふ青ふ山翠
蒼空より彩をどどく水鳥の空に翔るる空に身畫
園の中よあふるるくおらして物草を郎もまき
駈きて羈縻の被ふとてさめらふ湖の西ある方こそ
る儼あふるるあまき今日と日もせふ天晚より霧の會り

物草八十五

と求めく明月こそまき今まきと其後とてはの
小宿飲次の日風り起出くゆきと侍者を世夜の園と
るり園峰代起く白雲は今まき日脚はよも過こりり
から房娘大納言おまき御る危園とたづねはる門たふ
傾然とてとて叫門代清ふ門吏物まき郎が弊爛さ後
まきかよま達廻垢面のほほよの一個の葦葉芭蕉皆は頁
たふはまて楓顔のを思ふんて過一遭くくと吐く
に物草を郎とて代園とて這等が通るる門内
入るる門吏去喝して罵る日作る代那里とまきとて不恭
あり疾まきん根まき轉れたまきんらひまき小物草を郎



が白僕が身獲髪膚々々父母に交り一折かむと坊の死
小郷芋が恨尻喰く傷致なれ縄とこく一堀去木
一更富の位安藤十郎の氏々々々て金々々々々
揮回たすり根々々撃たつて一と堀とれふふ記
たずのてよ僕々々々も簿面々々々一たり長片一
根と嚙くらんり廻く酒とのまんも情願うりて之也
とて河門吏捕修く作響ふるて小夜審るるて代
祝する作の状あまう契爛は借認うりて小物草
を即る白錦を衣く綱と整ひてててて君よの面また
壁更りり吹く代々の直ありて清潔とや御事と肉根

少くは相とぬくさめりあ中そ世の人席の注成被て
羊を質する尻よりやててててて小其言理れ
べ門吏對あふ小辞す物草を即と扯笛て洋細は此代
報告よああ事郷を今々望成見んとあけりさこ一隨即物
草を即代取入もひふ鄙野小月まをぬ珠簾代持
うけ一を關へ上り河と上薦席り入とかりも害怖く
れす大踏歩として磯島よく其基刺目どく至
くふ親隨の土々々の碓晒く背小藁芭も有らひ
そぶく傾然くもさくうて濃とも狂んが僕も死
人の拳動も其石茶と吹くうあ有季郷達

小者観じて若くは野人をも上りては
多しぬも道理よりと近く居し其姓字を
日つは物草を即ちあ等として東國の
英雄を今面選取おれり其名隠
あつらやあつて云わど併居る迄侍の士一個も
は掩々嘆つるふとの事有り有季御
ささかへて技をあらわす空を伴
代會とて即頭地小の西脚天子朝
斗代身は翻轉して數回禪を代
的物件露れけふ侍女の輩
物草を即ち満

近侍の武士他が先代其々相
と代が道一物草を即ち提佐
とてふ有季郷を代制する
指葉とけし物草を即ち向ひ
と小見の戯れ物草を即ち
叫同く名を異ふと嘆ひ詰
即ちんがもんも洲同く異
物草を即ち満

面を色に生じど壺の遠國よりかきくふふれは其やど
の管待をわらうは久理よりと引くはく教杖と傾け
此の器をく喫く煙耐をく湯乃酒樽のやうに傾き
お母の酒を飲くと鯨の百川とやうなぐくたるあよ
皆くくふふふと飲りくふふ如瓶類子悠地とくふこよ
酒量もあめがく酒席はく収拾器はくくくく物直
ま即右を河破くくく等も俺身の損得もく管く
ぬまふ音音くくはくはく人ふ此酒を其のあはく
賜りく酒をくく酒をくく酒をくくくくくくくくく
お母の酒をくくくくくくくくくく物直を即く面をくく

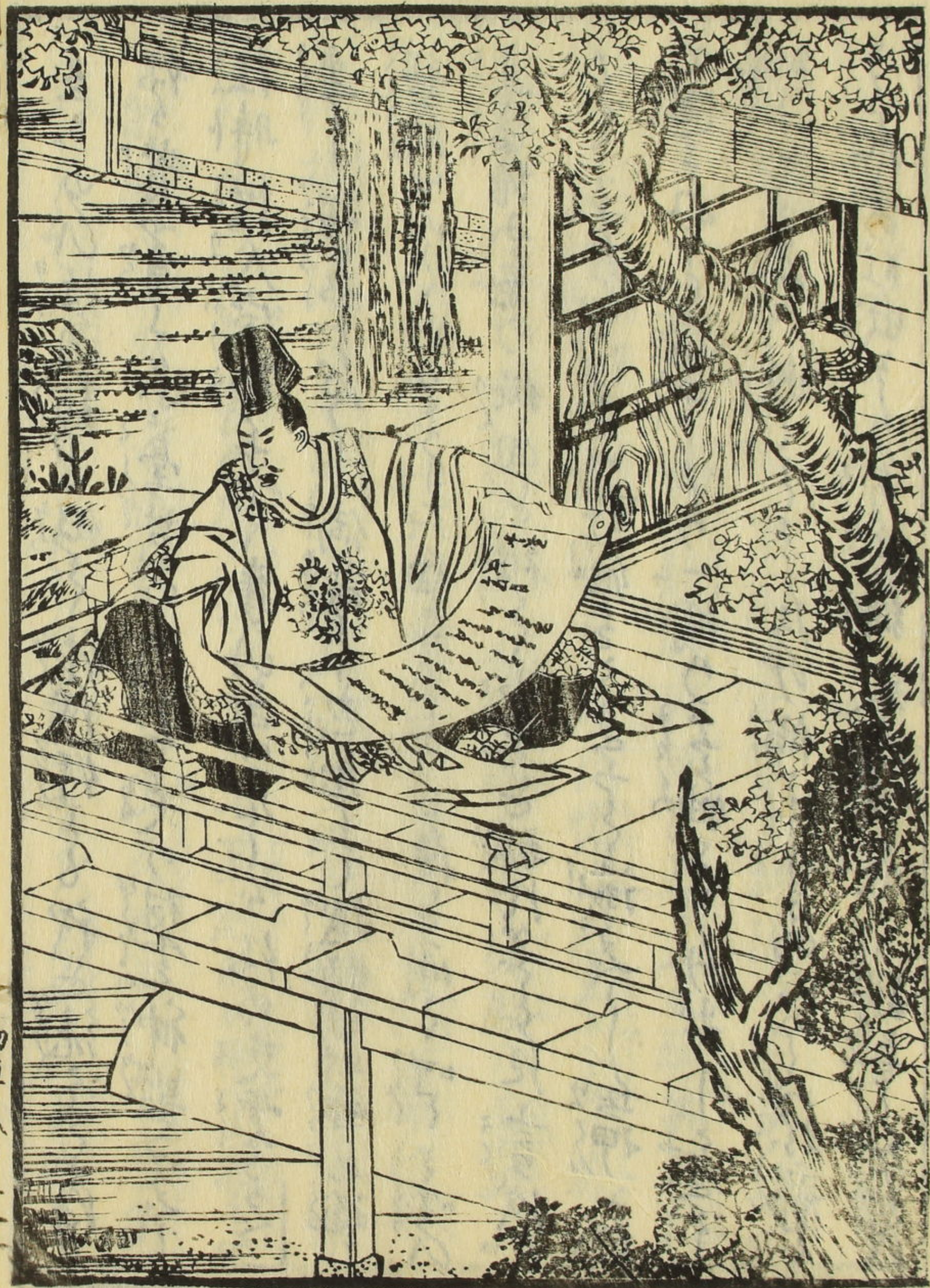
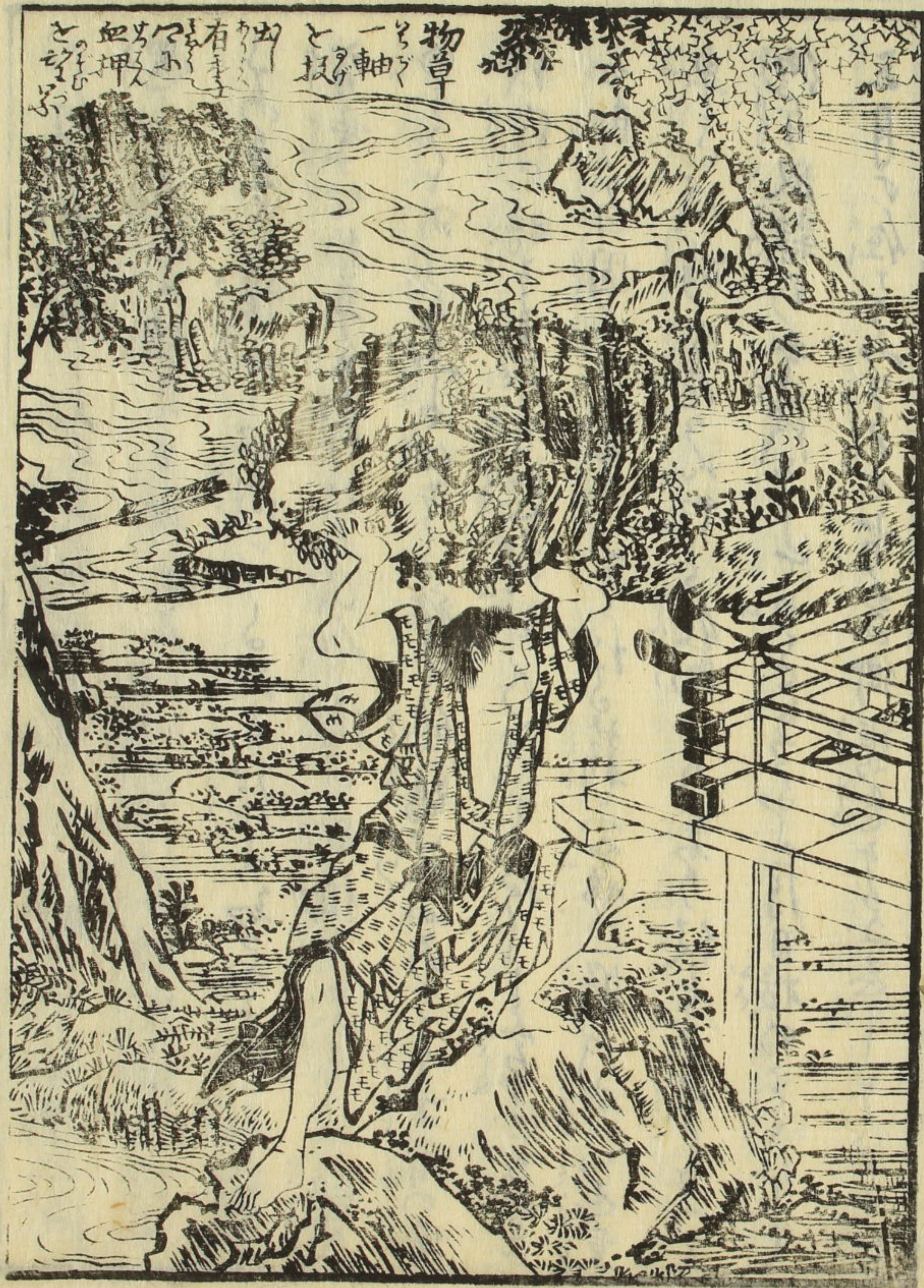
観わくくふお草を所漸く酒氣湧上るあや、搦地く傷
て其く動く地くく睡をくくと親随り土這を候づ
處くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
お母でよしてくくく退教をくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

第十六回

托_二天神靈頓_一愈_二疾_一
射_二雌雄鶴_一長_二絶_一挿

可況有季卿と物卓を即ち風顛りてくちをいで其音
指の秀らふ凡そらぬものゝ系一親隨の士を以て
云ふより一せりし渠が油静に現ひなすよ又醉舞て狂
醒に射着る雷の吼がごとく一人に懼怖ぬ丈夫の膽力
と見くといふく血影の渠が血に沈んと便殿の長押ふ
架のりく弓矢はよみく个弓と満月をく引きおの
ま成接し強たぐ強く移り聴的一勢で物卓を即ち耳
根にさりて前裁の樹木あざと立其聴的の響きおの
を即睡にさるく一傾然と起と隔る房因より有季卿
の夢くく一謀人知くまふれ審問ありくうま成は接し

とこのひは風顛く傲く依代伴とも袂と流くを侍
伴の背を負くふ葉芭の中くて天の村雲神器をさ
往時深人室庫をく奪ひさのたぐはの支堂をさし
車一指兼とぐ一尙誤く包脱して抵頼るべ緋め捕て
盤同やんとあつるく物卓を即ち侍と聞く町くと嘆ひ
直造飛小鬼の被面と被く小見と赫んがごとくは言成云
くても真をいへば詳細とくはさく識るべく血押と款
て還ふく懐中より一箇のち油とさげせり一屋
跳下く之石は軽くく一ひげ倚通くまの心あへば粉齋よ
うらんもの形状より有季の緋表油は展く觀看くおとら

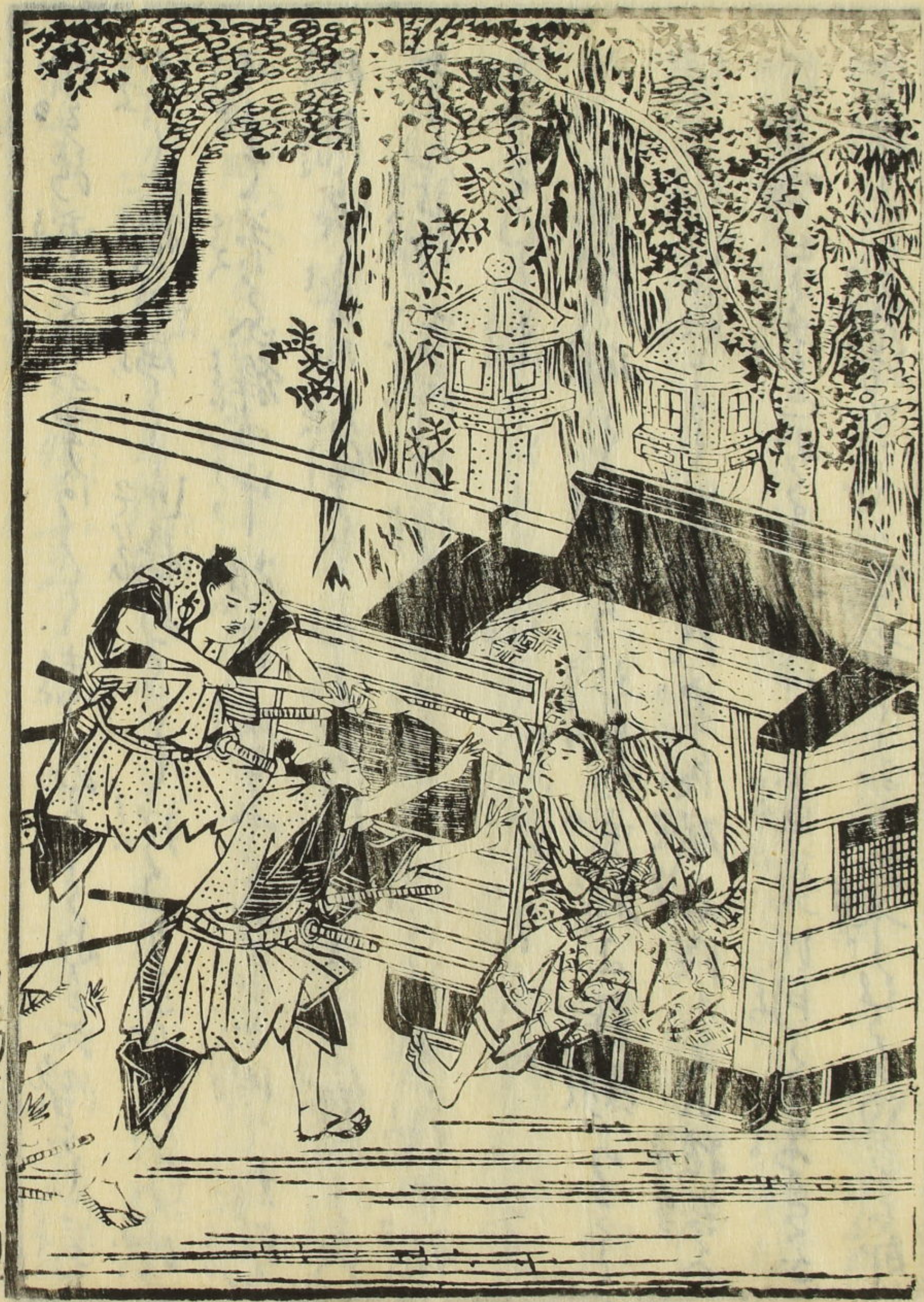
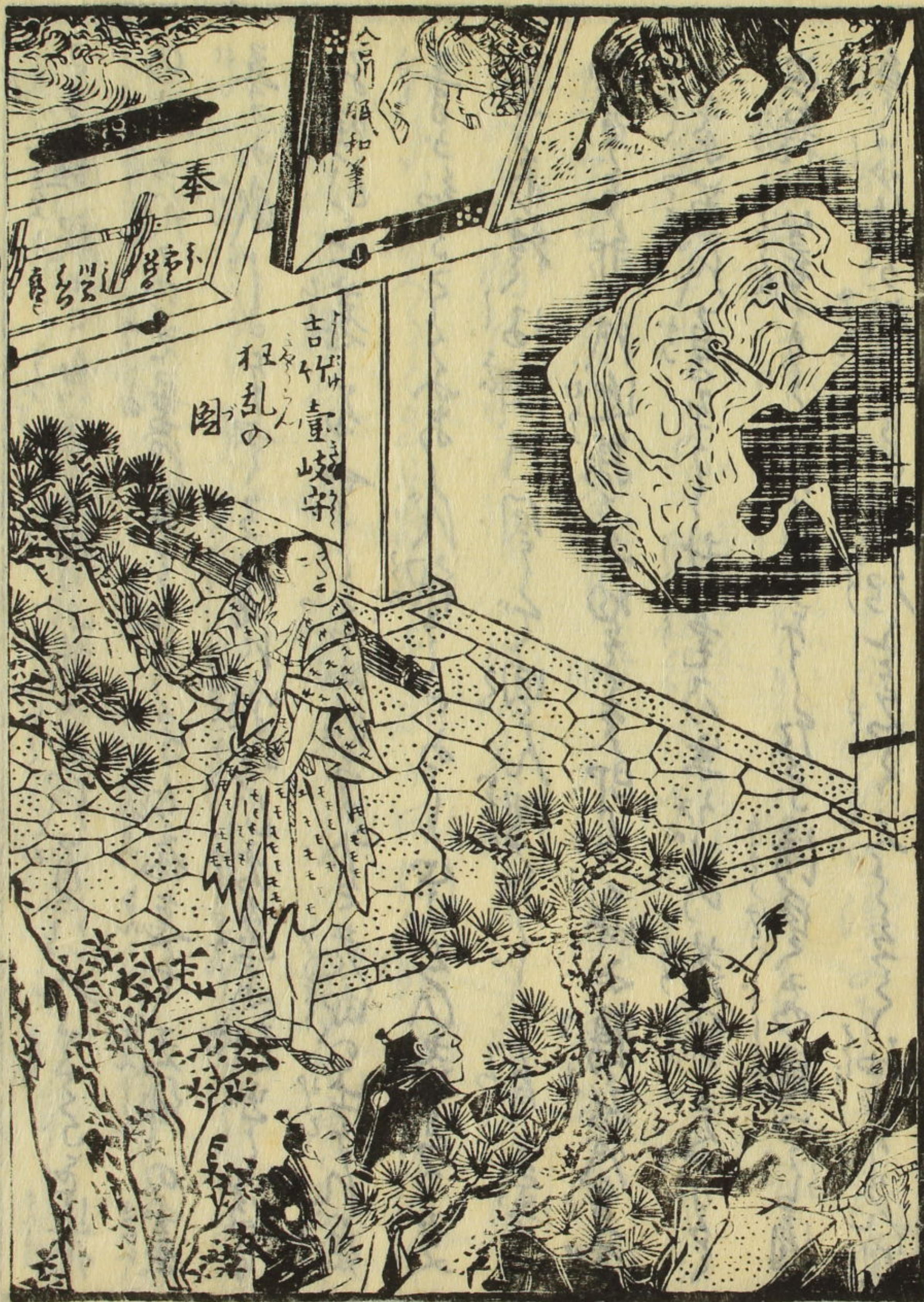


くんと喝来一々其我忠と感一仔細く血押とほし
還一のうよ物草を所と名代田恵に女個を抽とめり
よめ見く懐中に截めり此支條よ多きもの一人もあ
有季々物草を即に向ひ今卿の同僚をふりて部人
のどくあらうと心きし結く鳴鶴具あうく才者の害
代遊の時を自恣部野の氏とくなくとさうあおま
を即て日固りの事とくわる薪ふ在く隠代青の志堂
卑く代辭とくたうんやと任物よりまう後とく氏とく
他日奴隸のき代とくてりさうあは月日後のこくたて
三月の任とみうとく才季卿忠とく志一とく

うらとくせりまてや一はひのささきとも援例とく鎮地
氏代役とくふ三月代期限とくたふ支とく六代の控
しまんて代怒とく言とく議とく物草を即と回らふゆま
を即ち季卿の茅内代物とく傳邊とく耽岡とく名區同
蹟代巡覽とくふ假控とく惠とく桃細とくさうが一日北野
神廟とく拈香とく馬馬堂の紙馬代觀ありは一個乃武士
追侍の壬辰千人新后代護廟前にあはばきと懸てすこ
門外とく去りぬ物草を即も後より控へせふ右追の馬湯
り追り騎馬來輿數百人の役者とく代近接とく物草を
即とく代見とく其諸候とくあはとく個とく賦乃殺とく

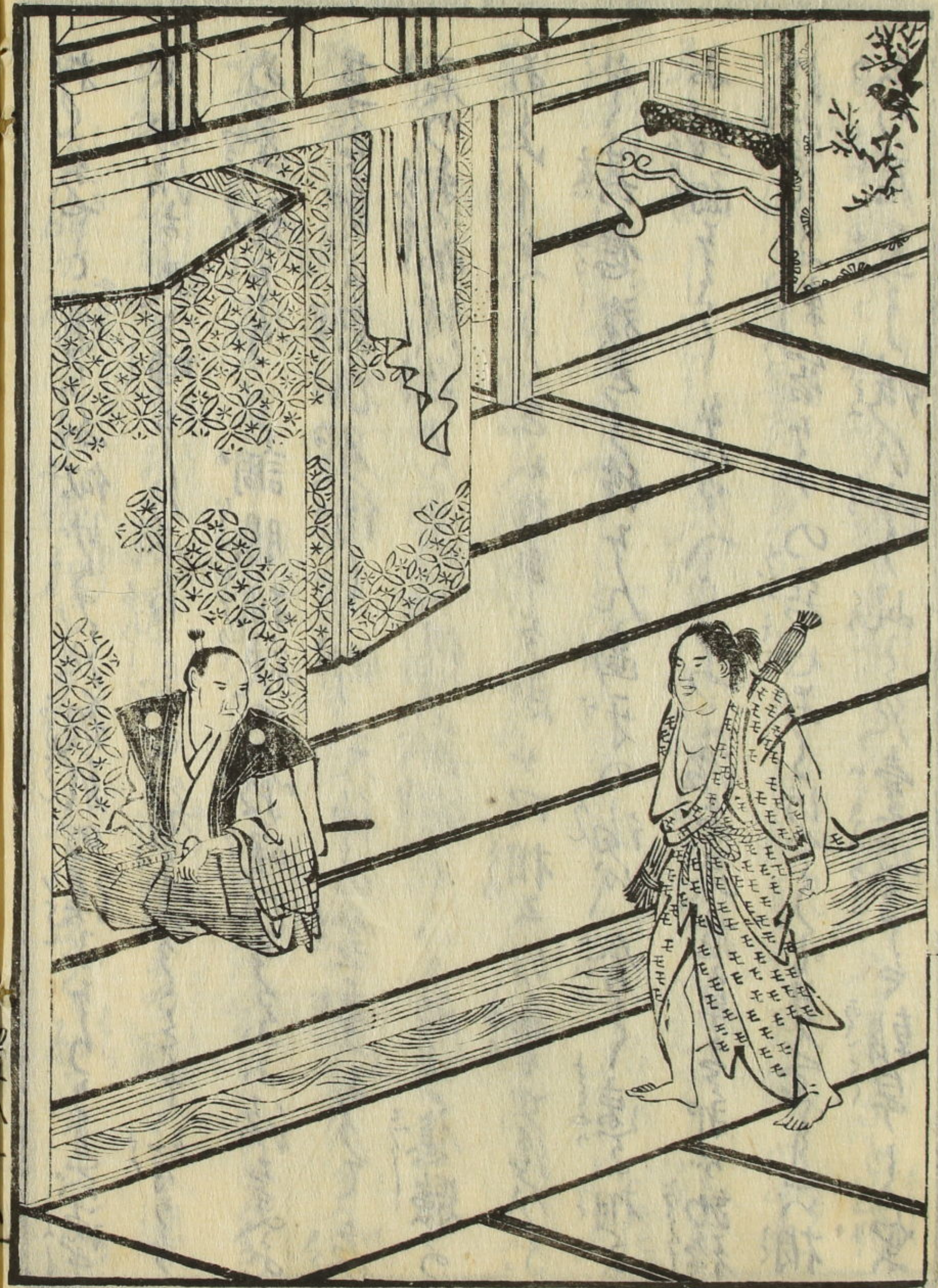
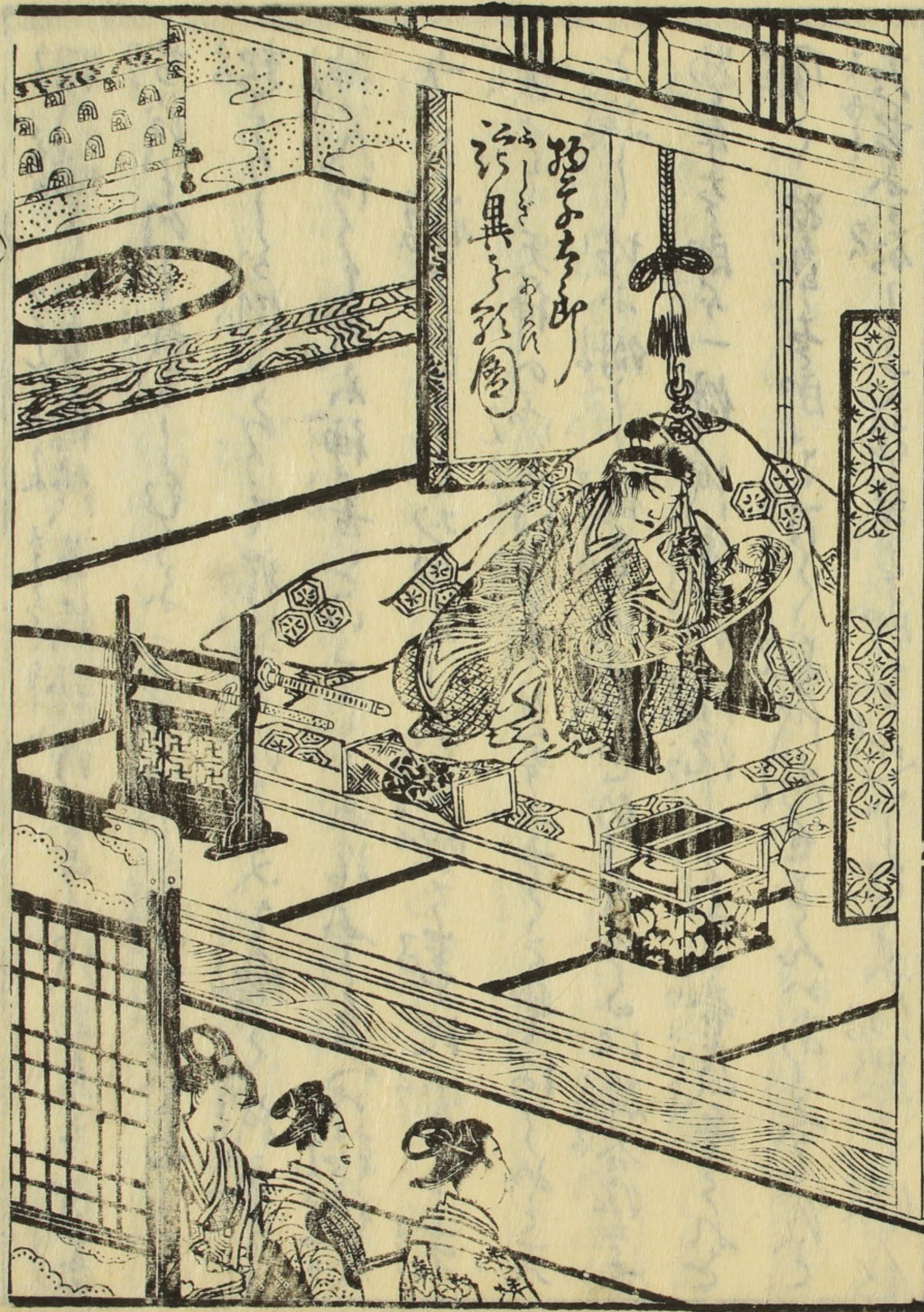
佛孫と看せりしふの武士多作乃代画内より抜取らん
右乃近臣圍住て乃代奉の轎子に推のせ搦起りよ送者佛
孫と看せりし後一初なる物草を所々の武士が抜取り
たるカも竹見たるあふとて其氣を青白て瘦弱しとぬ
祀の人々乃代室一の士西州高嶋乃領王吉作壹等
ケクあ何おて次の日吉竹乃京邸小應門、くふ門更物草
を所が卑陋を不快と身々々、何の幹支ありて又未獨一
く就門内ととるあや、倘請はれしついでと、跼地而坐殿
勤、一言成卑く身代總ごやと云ふ物草を即日代作
清きく、いんふと作が言つて、擬聲捧履も、てん作の

撰るお求めすおまのく、まらありとてお目六傷し
卑く、腰尻屈く、ゆ接めつて、ぼろろと、お目六傷し
嘆して、ささふ群の中相おの、求りやとて、あを、同て、胡
依流らば、身乃、ち、叫を、ん、と、ふ、代、何の、為、う、廻、る、と、い
まん、北野、毛神の、霊、夢、に、よ、り、て、相、お、お、奇、怪、を、流
まら、あ、ん、と、ま、あ、り、た、り、と、國、老、の、人、お、後、も、い、ぶ、く、と、ら、お
ふ、い、ん、と、い、く、圓、く、素、より、北、野、の、廣、祠、に、許、願、あ、る、と、い
て、説、異、と、う、く、備、細、に、宰、臣、殿、谷、治、を、夫、お、抜、取、る
は、ま、ま、が、日、と、ま、と、い、か、す、れ、毛、神、の、靈、夢、に、同、く、ま、あ、り、と、い
か、ら、い、と、い、名、濁、せ、い、と、う、と、い、ま、ま、が、お、折、入、し、と、い、物、草、を、即



この難観を白く背ふ葦の代目入るるを道徳
の仕立門の光景見せしむる如く病を治す天の雲
夢の感ぜしむる如く多嘴に物言ひ出さず小軒出く後日
み咲いと暮るる如くさかた治まると老成のまじりぬ郷
等が如くさかた治まると老成のまじりぬ郷
さかた治まると老成のまじりぬ郷
物言ひす所代近接ふ如くま即を身小鶴衣代言者
少其末古の代目入るる如くま即を身小鶴衣代言者
ぬ隸が言者りりり如く掃す如く清風を聴へり通る
きり子路が如く如く温和を言るる如く如く如く如く如く

あつちやと見ると似けられた親類の漢子やうな言は
るる治まると老成のまじりぬ郷
ぬ聖物たりと調服社袂て物言ひさかた治まると
草を即は對ひ名得し卿天神の靈夢ありて家
君の如く酒代ぬんとの一件 甚謝しり如く如く如く
あつちやと見ると似けられた親類の漢子やうな言は
るる治まると老成のまじりぬ郷
ぬ聖物たりと調服社袂て物言ひさかた治まると
草を即は對ひ名得し卿天神の靈夢ありて家
君の如く酒代ぬんとの一件 甚謝しり如く如く如く
あつちやと見ると似けられた親類の漢子やうな言は
るる治まると老成のまじりぬ郷
ぬ聖物たりと調服社袂て物言ひさかた治まると
草を即は對ひ名得し卿天神の靈夢ありて家
君の如く酒代ぬんとの一件 甚謝しり如く如く如く
あつちやと見ると似けられた親類の漢子やうな言は
るる治まると老成のまじりぬ郷
ぬ聖物たりと調服社袂て物言ひさかた治まると
草を即は對ひ名得し卿天神の靈夢ありて家
君の如く酒代ぬんとの一件 甚謝しり如く如く如く



ねの唾く一身存侍 目眩神あ けり物草を即業
ぢ河のめく戴くしむふ一髪又呵く夢拵にふりて
起るるが倒ふらりて流正く流ま又と喚ぐ代置を
神人けりて代み神舌といふらあ終やとくバ精神爽
あゝ疾をれがとくおびるふ月醒て事に変り光
景く天神の威得まき先をさくそ我のめと天
と持し波ふ附し歡喜の眉といひまらるに及谷流吉走
物草を即一件代置り活況くふふ又壹夜守れと
厨く物草を即と古く思代附せとんばあふとんばと
左方ふ家して物草を即とせへむふ何處より生ん

踏河をまきまきまおる壹夜守る天神の鷹強りしと
あふと喜ひ還願の扱あふりし馬越代齋然
神供の寄りど準備し賽神代をふふふ作らぬ
壹夜守の委疾河淨く縁故と尋ふ其又吉行
入道在世おくれ遊獵とこのふ野小権くそ見
送るるふが一月神介おびる飛鳥と射く其付佛と
試しふ一個の飛鶴雲井遙小翔りまふ代吉行今道
移しひと申して彈く終久のやまらぬ飛鶴とはぬ
くらし具しふ就畜くふの叢の中ふ隣りりし代後
若ふ家してそ終と拙し索しむふ縁くあつて箇鶴

とあり入道の前より舎ぬ入道より氏見より鶴の首
河射斬らるる其首を夫の隙に地代披露すむ
まもろを獲て得ば其日を備とやめり田を又次の
日鶴河射らるる向者射る雄鶴の首代嘴より
くへ一雌鶴をくへ入道より河有て鶴を數百歳
於新代深のくも高く圓ふ雌雄と一個を射らる
ぬふく便をたるとあり飛禽たも蛇藤りはと志
より雄の首代獲く入道が矢をたよ新代頭たる
あふれをりなどくく入道より殺生とすめりて
くへ一雌鶴のくへ河をたよ又一個の碑と違く其下

小園鶴と埋めり佛軍をく獲くも世はくく鶴
塚をく今をくく島のかよはくくく人個を後
堂波守が世をくく先心風の作らるる侍妾親語を
よ射よくくくたひくくねん天下小名の新國を後
て治療を付くくくくくくくくくくくくくくくくく
重くく勝賞標渡くく火性を信くくくくくく博土
とくくくト河河くくく祖先の能狭あるくくく文と
重くくく後個鶴乃をあり河をくくくくく神仏あり
其蘇子代清水の柳をくくくくく北野の祠唐を
雲嶺ありくくくくくくくくくくくくくくくく

物草を即お出さるりて神カミ言コト行ユクりぬるゝの被カケさ
くくくおとト成ナリしゆユだダかカふフとト共トモなり

物草太郎卷之八終

物草八十一

